



奉仕を通じて
平和を
田中作次
2012-13年度
国際ロータリー会長
【2012-2013年度RIテーマ】

FUJIEDA SOUTH ROTARY CLUB
藤枝南ロータリークラブ会報
例 会：毎週金曜日 小杉苑 藤枝市青木2-35-30 TEL：054-641-3321
事務局：藤枝市青木1-11-10 TEL：054-647-2300 FAX：054-647-2040
E-mail: club1991@fujieda-rotary.org
会長：村松 章隆 副会長：早川 清人 幹事：内山 淑夫 副幹事：松浦 正秋
第1043回



<http://www.fujieda-rotary.org>
●ソング 君が代・奉仕の理想
●ソングリーダー 鈴木 健夫君

会長報告

村松 章隆君

皆さんこんにちは！先ほど本年度最後の理事会を終える事ができました。



理事会でも申し上げましたが、会員の皆さん、理事役員のみなさん、ご協力、ご支援に感謝申し上げます。

話は変わりますが、ワールドカップの日本代表の出場も決り、藤枝出身の長谷部選手には、市民を初め、私ども藤枝東サッカー部のOBとしても誇りです。これからの大きな目標に向かって、これからの活躍を大いに期待したいと思います。

さて、あと3回の例会の内、私年度の締めくくりとして、3人の方に卓話をお願いしております。本日は、そのお2人であります 小林会員、渡辺会員をお願いしております。

オオトリは、富澤会員をお願いしておりますので、本日は、両会員よろしく申し上げます。

理事会報告

内山 淑夫君

- 2013 - 2014年度年間プログラムについて承認されました
- 2013 - 2014年度事業計画案・予算案について承認されました。
クラブ計画書、基金勘定の表記を一部変更。
- 7月・8月のプログラムについて承認されました。
納涼例会事業計画書について承認されました。
8月23日(金) / 日の出館 / 焼津市小浜1412-1

焼津大崩、日の出館において、十六夜の月を鑑賞し、親睦を深める。

幹事報告

内山 淑夫君

- 2620地区より
RID 2830 緊急のお知らせが届いております。
RID 2830のホームページに不正なコンテンツが挿入された可能性があり、ホームページにアクセスするとウィルス感染する恐れがあります。アクセスしないようお知らせがありました。

出席報告

望月 誠君

本日のホームクラブ出席者	前回の補正出席者
38 / 43 88.37%	38 / 43 88.37%

- (1)欠席者(事前連絡とメイクアップをどうぞ)
植田君 櫻井君 川口君 佐野裕君 殿村君

スマイルBOX

望月 誠君

- 6月18日に誕生日を迎え65歳になります。これからも、夫婦仲良く歳を重ねたいと思います。 小池 吉久君
- 妻への誕生プレゼントありがとうございます。毎年たずかります。竹田敏和君
- 結婚祝いありがとうございます！47年目に入りました。 富澤 静雄君
- 結婚記念日お祝いありがとうございます。毎年思い出させていただき感謝いたします。 伴野 正明君
- 結婚記念日のお祝いありがとうございます。22年です。 松浦 正秋君

- 静岡高校ラグビー部、総体優勝です。15年ぶりです。二男が2トライしました。

松浦 正秋君

- 先日のロータリーゴルフコンペで良きパートナーとハンディキャップに恵まれて優勝させていただきました。久々の出場で申し訳ありません。ありがとうございました。山田 壽久君
- 「ジェ、ジェ、ジェ」「あまちゃん」を見ていない人はこの意味がわからないと思います。水曜日のロータリーのゴルフコンペで人生2度目のホールインワンを達成しました。当日、志田次期ガバナーもプレイしており、さっそく次期ガバナーより祝福の言葉を頂きました。

伊藤 恒夫君

スマイル累計額 597,332円

会員卓話

「大膳は非情に似たり、小善は大悪に似たり」

小林 正敏君



その昔、或る講演会で聞いた言葉が今でも耳を離れない。「人間の一生の中で自分なりの誇れる「三師五兄七友」を持ってたら悔いのない充実した人生を送ることができるでしょう。」

私にとって大切な師の一人は京セラ創業者の稲盛和夫氏である。

25年ほど前、京都のJCOBが稲盛氏に懇願の末に誕生したのが「盛和塾」である。縁あって全国で12番目に「静岡盛和塾」が発足した。発起人の一人として開塾以来、稲盛氏と顔を合わせる機会があったが直に言葉をかわすことは稀であった。当時は全国各地を追っかけたものである。確か三重県の松阪で行われた勉強会の後の懇親会で隣り合わせる機会があった。常に出席者は稲盛氏との名刺交換で列を成し、ゆっくり相談する機会はなかったがたまたま時間が開いた時予てから聞きたいことがあり相談を持ち掛けた。

その詳細は省くがその時の返答が上記の言葉である。それまでは稲盛氏について実業家としての実績はともかくも成功を傘に随分言葉に踊らせているとの思いがあったが一瞬にして稲盛

氏の間人としての生き様に惚れ込んでしまった。以後改めて稲盛氏の著作を読み込んだものである。JAL再生についても良く言われているが稲盛経営の柱は二本である。

「物心ともに社員に思いを馳せる」と「アミーバ経営」である。当然なことながら未だ我が経営は全く足元にも及ばない。ただ自社の経営の基本に常に稲盛氏の教えがあることには感謝するばかりである。稲盛経営哲学の集大成である「京セラフィロソフィー」を稲盛氏の許可を得て、多少修正の上「共立フィロソフィー」としてまとめ、日頃より全社員にその真髓の周知徹底を図っている。

「青春の山旅
1973年夏 アルプス
とキリマンジャロ」

渡辺 哲朗君



今から40年前の1973年(昭和48年)の5月から8月の4ヶ月、ヨーロッパアルプスとアフリカのキリマンジャロを目指して山の旅に出かけた。当時の日本は田中角栄が総理大臣で、高度成長時代がまだ続いていて、いけいけドンドンの時代だった。私は当時東京の社会人の山岳会で、岩登りや雪山に熱中していたので、いつかヨーロッパアルプスへ行ってみたいという夢があった。

東京の会社に2年勤めて、藤枝の実家へ帰る半年がチャンスと決めて計画を練った。まずはmatterホルンのあるスイスアルプスと、当時読んでいた本の影響で、チロル地方の山と、アフリカのキリマンジャロに目標を絞った。一文なしだったから実家で100万円借りて山の旅に出かけることになった。当時は1ドル250円位だった。

横浜港を出発して、3日後にナホトカに着いた。そこからシベリア鉄道でハバロフスクに行き、飛行機でモスクワに飛んだ。8時間かかった。モスクワで2泊後ウィーンへ飛んで、そこでツアーは解散となる。あとは一人旅だ。

ウィーンから車でチロルのインスブルックに行った。沿線の景色はカレンダーの写真をみるようきれいだった。インスブルックは人口15万人の歴史のある街で、冬のオリンピックが開催さ

れたことがある。インスブルックでピッケルやザイル、登山靴などの山の道具やこれから登る山の地図を買って準備をした。

そこからバスでエッツタールの最奥の村、フェントという小さな村に着いた。戸数 30 戸位の小さな村で、5 月の下旬でもかなり寒い海拔 1900m の村だ。ここで 1 泊朝食付き 800 円のペンションに 1 ヶ月余り滞在することになった。フェントはエッツタールアルプスの登山基地で、ここで登ったのはヴィルトシュピッツェ(3774m)、ワイスクーゲル(3739m)、シミラウン(3606m)の三つで、アルプスの百名山に入っている。この 5 月から 6 月にかけては、山にはほとんど人がいない。独りで氷河を登るのは気持ちがいいが、ちょっと心細くなる。シミラウンという山は後年の 1991 年に、この山の近くで、アイスマンが発見された。最近 NHK の番組で解剖結果が報道されたが、それによるとアイスマンは 5300 年前のイタリア系の男性といわれている。自分が登った山の近くで発見されたので、今でも興味をもっている。このアルプスでいえることは、麓の村の牧草地から谷に沿ってハイキングコースが続き、氷河の手前で山小屋が建っている。そこから先はピッケルとザイルの山の世界になる。山小屋は石造りで頑丈で美しい。内部もストーブやベットが完備している。とても日本の山小屋の比ではない。

6 月末日に 1 月以上お世話になった宿の家族に別れ告げて、スイスのツェルマットに向かう。マッターホルンはさすがに迫力があつた。村のテント場をベースにしてまずはマッターホルン(4476m)に向かう。7 月 5 日、ヘルンリ小屋を 5 時頃出る。ヘルンリ稜は急な岩尾根が続いて、両手両足を使うところが多く気が抜けない。ソルベイ小屋の上部の肩からは雪田も出て、フィックスザイルが頂上近くまで続く。午後 1 時、頂に立つ。長い下降が始まり、下りの方が難しい。日が暮れ、雪が降り始め雷が来た。近くですさまじい落雷。午後十時ビバーク。ツェルマットの灯とにらめっこをして、夜が明けてまた降り始めた。小屋までは 1 時間足らずだった。ヨレヨレの足でツェルマットに戻ったが、「百年も前にマッターホルンを初登攀したウィンパー達は確かに偉大だった」という思いを強くした。その後、モンテローザに登った。大きな雪の山で、気持ちよく楽しく登ることができた。これでアルプスの山登りは終わりに

なった。

チューリッヒからケニアのナイロビへ飛んだ。ナイロビ空港の入国管理でかなり手こずった。自分の身形が薄汚いのと今夜のホテルが決まっていないこと、当時、赤軍派が海外で事件を起こしていたこと等でだろう。アルプスは一人旅だが、アフリカは松本の山の先輩と一緒に、ナイロビで彼が来るのを待っていた。合流してキリマンジャロに向かう。キリマンジャロはタンザニアにある。麓のモシの町からバスでマラング村(2400m)に着く。着くや否や十人位の若者がやってきて「自分を雇え」という。キリマンジャロは 4 泊 5 日の登山になるが、一日千円で 20 キロの荷物を持つという。一人雇って出発した。キリマンジャロ(5895m)は富士山を大きくしたようなもので、技術上問題はないが、標高が 6 千米近くあるので、高山病にかかる恐れがある。なのでゆっくり登ることにした。ポーターもポレポレをよく言う。初日は第一小屋(2800m)までジャングルの中を歩く。二日目は密林を抜け、ヒースのなだらかな高原を歌を歌いながらのんびり歩いた。第二小屋(3700m)からキリマンジャロの雪が鮮やかに浮かぶ。三日目、第 3 小屋(4500m)へ向かう。突然大平原が広がり、キリマンジャロが全貌を現わした。小屋には水がない。岩と砂だけの世界だ。夜中の 1 時に出発。砂礫の登りで歩きづらい。富士山と全く同じだ。日が昇り、かなり明るくなった頃、山頂に立った。ここに長くいると乾燥(ドライアップ)しそうなので、一目散に水場のある第二小屋まで駆け降りた。その後二人で、レンタカーでタンガニーカ湖やセレンゲッティの大平原を走ったが、アフリカはとにかく広い、空も広いと思う。

異国での山旅を通じて一番思うことは、自分は日本人であって、祖国は日本であるということ。日本の自然や文化というものから、自分は決して離れることはないだろう。今でもその思いは変わらない。今も、頭は鎖国状態で、日本の祭りと酒を楽しみに、ぼちぼち暮らしている。

今週の一言

山田 壽久君

私の父は、昨年 12 月 26 日に亡くなり、31 日に大勢の皆さまにお見送りをいただきました。誠にありがとうございました。

父は、大正 10 年に由比の町から歩いて 3 時間ほ

どの、鍵穴という山奥に産まれました。百姓家の息子として、苦学をして大学に行き、戦争をへて、静岡県庁から山田組の婿として藤枝に来ることになりました。

若い頃は質実剛健の大変厳しい父親でありました。今考えると、長男の私には特別厳しかったように感じます。

ちょうど私の年には、建設業界の会長として、今の業界と同じように公共工事の減少や、建設会社の経営が大変厳しい状況を、協会の会報で訴えています。30数年後、今まさに建設業界が同じように、大変厳しい状況になっています。今、私がいろんな場所で父と同じ思いを話していることが、不思議な感じがいたします。時代は同じように変遷する事を、実感しています。父も、業界のことや、会社の経営で同じ悩みを感じていたことが、とても身近な父を感じます。

例会プログラム

例会日	クラブ行事	摘要
6/14(金) 第 1044 回	会員卓話	
6/21(金)	休会	
6/28(金) 第 1045 回	最終夜間例会	夫婦同伴例会

(担当 / 漆畑君)